目白大学　総合科学研究
第16号　2020年2月　149-156

研究ノート

横浜市における英語教育の特徴とその意味

The Characteristics of the English Education in Yokohama and Its Meaning

栗原　浪絵
（Namie KURIHARA）

Abstract：

This paper describes the way English education in Yokohama has developed since 2009. Yokohama city has made an original curriculum called “Yokohama International Communication Activities” for elementary school children.

First, children can learn English based on the YICA curriculum, which is organized as a small step activity. In the curriculum, children can experience communication with homeroom teachers, AETs (assistant English teachers) and IUIs (international understanding instructors). Second, teachers are allowed to express their viewpoints on their own when they make the curriculum. They can develop their creativity when they make their lessons in the classroom. Third, the board of education in Yokohama published a book named “The Collection of Cases for YICA” for the elementary school teachers. It is useful for the teachers when they make their daily lessons in the classroom.

The English education in Yokohama tells us that it is significant to support the teachers’ creativity in organizing the curriculum.

キーワード：YICA、コミュニケーション体験、教師たちの声、創造性、事例集
Keywords ：YICA, communication, teachers’ voice, creativity, collection of cases

はじめに

2011年に小学校で正式に外国語活動が開始されて以降、どこの地域でも英語教育をいかに進めていくか模索中であると言ってよい。2020年にはいよいよ、小学校５年、６年で英語が教科化されるが、まさにこの10年は小学校、中学校を通して、どのような価値観で英語教育を進めていくのか、そしてどのようなカリキュラムを実際に作っていくのか、試行錯誤の時期であったといえるだろう。さらに、大学入試も大きく転換していく時代に英語教育は教育改革の骨子であるといっても過言ではない。本稿においては、横浜市における英語教育の特徴とその意味を小学校の外国語活動に焦点を当てて検討

栗原　浪絵：目白大学人間学部児童教育学科非常勤講師

し、将来の日本における英語教育の方向性を探る手がかりを得ることを目的としている。

横浜市の英語教育はその先進性で有名である。そもそも多くの外国人の居住する横浜市では1987年以降、小学校において国際理解教室と呼ばれる授業が行われ、2009年には小学校一年生からの英語教育が始まっていた。このような経緯の一端は、2019年に行われた学力調査の英語の結果にも顕著に反映されている。中学校３年時の英語の結果を見ると、都道府県単位の点数の中では１位、政令都市の中の点数ではさいたま市に次いで２位となっている[1)]。このような学力テストの好成績について文部科学省の担当者は、周囲に「外国人」が多い、「英会話教室の多さ」などの社会的要因を上げているが、横浜市の英語教育をそのような社会的要因を中心に説明することは出来ない、というのが筆者の立場である。結論を少し先取りしてしまえば、横浜市の英語教育の特徴はむしろ現場に即した地道なカリキュラム作りと教師たちの実践を応援する仕組みにあると思われる。

先行研究において横浜市の英語教育の特徴を、教師たちのカリキュラム作りを応援する仕組みに焦点を当てて分析したものは見当たらない。高井延子による「新しい学びとしての小学校英語活動」では横浜市における小学校国際理解教室を観察した知見に基づきながら、小学校英語活動の新たな可能性を探っている[2)]。高井の論稿は多様性を認めあう国際理解教室の長所をとらえ、横浜市の英語教育を基盤に将来の日本の英語教育のゆくえを探っている点で興味深い。本稿では高井の知見に学びながらも、横浜市の英語教育の特徴を教師たちの実践を応援するさまざまな工夫に焦点を当てて、検討を進めていきたい。

第１節　YICAの創設へ

1.1. YICAとは何か？

ここではYICAとは一体、どのようなものでいかなる特徴を持っているのか、探っていくことにしたい。YICAとは横浜国際コミュニケーション活動（Yokohama International Communication Activities）の略で、横浜市の小学校で行われている外国語活動のことである。そもそも横浜市は外国人との交流が盛んな都市として発展してきた。2009年１月末の時点で、横浜市内には77000人を越える外国人居住者が生活しており、私立学校に進学する外国人児童・生徒も多い[3)]。このような背景があるため、横浜市では1987年に国際理解教室を開始し、子どもたちはさまざまな国の言語や文化に慣れ親しむ活動を続けてきていた。国際理解教室ではIUI（International Understanding Instructor）と呼ばれる国際理解教室外国人講師が、自分の国の言語や文化を紹介する授業を継続して行ってきたのである。そして、2009年にはこれまでの歩みを踏まえさらに小学校学習指導要領の外国語活動の指針に沿いつつ、小学校１年から横浜市全校でYICAの時間が開始されることになったのである。

指導体制としては当初から学級担任が中心となって授業を組み立て、実施することになっていたが、指導方法としては学級担任にAET（Assistant English Teacher）またはIUIを加えたティームティーチングが原則となっていた。子どもたちは小さい頃から、生の英語に触れることが可能となっているのである。YICAの時間では次のような子どもの姿を実現することをねらいとしているという[4)]。

○多様な異文化について、「違い」を「違い」として認識する態度や相互に共通している点を見つけようとする態度が身に付いている。
○英語に親しみ、様々な人々と積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度が身に付いている。
○身近な英語を聞いて、分からないところを理解しようとする態度が身に付いている。
○あいさつなどの身近な表現に慣れ、表現しようとする態度が身に付いている。
○身近な単語を見て意味を想像しようとするなど、文字に対する関心が高まっている。
○自分の名前や身近な単語などを書くことに親しみ、必要に応じて積極的に使用しようとする態度が身に付いている。
○様々な国の講師とのコミュニケーション体験を通して、英語が国際的にコミュニケーションの手段として有用であるということを理解している。

○世界の様々な状況や、世界の中での自国の状況に目を向けようとしている。

ここで注目したいのは、「様々な国の講師とのコミュニケーション体験を通して、英語が国際的にコミュニケーションの手段として有用であるということを理解している」という項目である。先に触れたように、横浜では国際理解教室と呼ばれる時間があり、6年間に6つの国や地域出身の外国人講師と触れ合い、異文化を体験的に学ぶことを通して、異なる文化の存在に気付く機会を与えているのである。この国際理解教室は横浜独自の試みであり、英語に興味を持ち、学んでいく上で重要な基盤となっているといえるだろう。2009年3月に刊行された『横浜版学習指導要領』では、YICA、そして中学校の外国語科につなぐ9年間の指導内容が聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの4技能に分類して具体的に示されている[5)]。この学習指導要領は、研究者、現場の小学校・中学校の教師たち、横浜市教育委員会が協同で策定している点に着目したい。この学習指導要領の長所は9年間分の指導の内容を系統立てて、スモール・ステップで指し示した点にある。ここでは「聞くこと」が25段階、「話すこと」が16段階、「読むこと」が12段階、「書くこと」が12段階で整理されている。しかし、具体的な指導方法の例としては、基礎的指導方法と発展的指導方法が短い英語の受け答えを例示しながら簡単に示されているにすぎない。現場の教師たちが具体的な授業のイメージを抱くためには、もう少し、授業の事例を提示するなどの具体的な研究を推し進める必要があった。

1.2. 2010年―YICAのベース・カリキュラムの特徴

YICAのベース・カリキュラムの大きな特徴は「コミュニケーション体験」である。「コミュニケーション体験」の中には、お互いに英語でやり取りをする直接的なコミュニケーションの体験以外にも、AETと一緒に歌を歌ったり、AETに絵本を読んでもらったりする中で「AETの豊かな表情やネイティブスピーカーの英語に触れる活動」も含まれるという[6)]。また、IUIの場合では簡単な遊びを体験するなどして、「IUIの出身国や出身地域の文化に直接触れるような活動」が想定されている[7)]。つまり、YICAにおいては、AETやIUIとの関わりが言語、文化、ジェスチャーなどの広義において重要な意味を持っているのである。しかもこのような「コミュニケーション体験」が単発的に採用されるのではなく、意図的、計画的に設定されている点が肝要である。

2010年の『横浜版学習指導要領指導資料』では小学校の指導事例として38単元、中学校の指導事例として15単元が掲載されている。この本の特徴は1時間目から4時間目までの単元の展開例が示された上で、担任教師（HRT）とAETとの対話が具体的に記載されていることである。以下は小学校6年の「横浜を案内しよう！」という単元である[8)]。

HRT : This is Chinatown. You can see many Chinese restaurants. I like nikuman. Do you like Chinese food?
AET : Yes, I do. I like Chinese noodles, too.
HRT : Me, too. It is very good.
HRT : This is ZOORASIA. You see many animals. I like okapi. It is very cute. What animal do you like?
AET : I like giraffes. Do you know giraffes?
HRT : Yes, I do. This is a giraffe.
AET : Thank you.

ここではAETと担任教師のやり取りが、簡単な英語で例示されている。「チャイナタウン」、「ズーラシア」など横浜の有名な場所を提示しながら、会話が進んでいる。「肉まん」、「オカピ」など子どもたちが好きそうな物を提示しながらやり取りが進むため、もしこのような会話が実現するならば子どもたちはこのやりとりを楽しんで聞き、自分たちの活動につなげていくことだろう。

また小学校5年生の「What am I?　なりきりクイズ大会をしよう！」という単元ではAETと担任教師のやり取りが以下のように示されている[9)]。

AET : I am an animal. I am black and white. I can swim. What am I?
HRT : Are you a penguin?
AET : No, I'm not.

HRT : Umm… Are you a panda?
AET : That's right.（絵を見せる）Great!
HRT : Yeah!

これは「スリー・ヒント・クイズ」と言って３つのヒントを出す中で相手がなり切っている動物を当てるクイズである。一つ目、二つ目のヒントですぐに分からないようにすることがこのクイズのポイントであることがはっきりと分かる。ここでもAETと担任教師とのモデルを見せる会話が重視されていることは明らかである。ちなみに2010年の『学習指導要領指導資料』では、当時、使われていた『英語ノート』との関連や他の教科との関連も記載されている。しかし教師たちの生の声を生かすにはもう少し時間をかける必要があった。

第２節　教師たちの声の反映

２.1.「単元づくり」の実際―2012年

2012年には横浜市教育委員会より『授業改善ガイド、単元づくり編』が出版されている。この本も『横浜版学習指導要領』と同様に研究者、教師たち、横浜市教育委員会が協同で作っているが、より意図的に教師たちの声を拾い上げていることは明らかである。ここでは、実践の場の声をどのようにしてカリキュラムづくりに生かしているのか、具体的に見ていくことにしよう。「『単元づくり』には創造性・発展性があります。毎時間の授業を振り返り、次の授業計画を変更していくことが『単元づくり』だからです。最初に立案した指導計画に縛られて、子どもの学習実態に合わない授業を無理に進めていくことは避けなければなりません」という言葉からはこの本を作った姿勢が読み取れる[10)]。指導計画を不変のものとして想定するのではなく、可塑性のある予定として柔軟にとらえているのである。

『授業改善ガイド』では現場の教師たちの声がイラストや写真と組み合わせながら紹介されており、実際に授業を行ってから出てきた課題とその解決法を見い出すことが可能な体裁となっている。例えば、小学校２年生の「おおかみさん、いま、何時？」という単元では、実際に授業を行ったある教師の感想が具体的に述べられている。

「前の単元『気持ちのよい挨拶をしよう』で様々な外国語でのあいさつに触れた際は、AETによる英語での問いかけ、投げかけに対し、『英語わかんない』『何を言っているの？』といったつぶやきがありました。しかし、めあてを提示して見通しをもたせたり、複数の単元に渡って同じような活動を繰り返したり、絵本を活用して手がかりを提示したりすることによって、初めて触れる表現をAETが使用しても、不安を訴えるつぶやきは聞かれなくなりました。」[11)]

このような教師の感想を引き出す基盤には何があるのだろうか。まず、この単元では授業の実際を単に図解するだけではなく、授業改善の視点として、「めあてを提示することで、子どもたちは見通しをもって活動することができる」「同じような活動を繰り返すことは、低学年の児童にとって安心して活動に参加するための支援となる」などのアドバイスが具体的に述べられている。このように、授業を作る上での小さな、しかし重要な手立てが丁寧に記されているのだ。めあての提示、繰り返しの活動といった具体的な方法が与えられていることは、授業の展開に悩む教師たちにとっては肝要であると考えられる。

さらに興味深いのは、「おおかみさん、いま、何時？」という低学年の授業において多言語が導入されており、多言語に出会った子どもたちの喜びを担任教師が表現している点である。

「今日はいろんな国の数え方を教えてくれました。初めて知ったのは、韓国とスペインとフランスです。中国と韓国がちょっと似ていました。面白かった言葉は韓国です。韓国は中国と三の数字が似ていました」「問題を出してくれて楽しかった。スペインとフランスが似ていて、なんでだろうと思いました。」このような子どもたちの感想に対して教師は「韓国語と中国語、スペイン語とフランス語など、似ている言語と似ていない言語があることに多くの児童が気付いたようです。」と記している[12)]。ここでは、英語、韓国語、中国語、スペイン語、フランス語と５種類の外国語に子どもたちは出会っている。多言語に出会い、触れる活動が小学校２年という低年齢で行われていることは

注目に値する。さらにそのような活動を行った子どもたちの疑問や喜びを、教師が丹念に拾い上げていることも、子どもたちの学びをさらに豊かにしていく根幹となっていくことだろう。

２．２．絵本の世界を楽しもう―2013年

2013年に出版された『授業改善ガイド、教材研究・授業実践編』では子どもたちの現状を把握した上での授業の進め方が、前年の本よりもさらに具体的に記されている。小学校３年生の「絵本の世界を楽しもう」という単元の実践例について、見ていくことにしよう。

ここではエリック・カールの『はらぺこあおむし』を題材とした４時間の授業計画が掲載されている。まず、子どもの実態把握として、「本学級の子どもたちは活発で、新しいことに興味・関心をもち、YICAを楽しみにしている」と記されている。その一方で、英語に対する「慣れ親しみの状態や気付きの内容には個人差がある」という[13]。このような個人差に対して教師としては、「表現することをためらっている子どもには、担任が寄り添い一緒に声を出して支援」をしているし、「積極的に友達とかかわっていても、相手に対してマナーを守っているとは言えない子ども」には声をかけるようにしているという。このような担任独自の気付きがはっきりと表明されているのだ。

それでは「絵本の世界を楽しもう」という単元を設定した理由はどこにあるのか。教師は「国語の学習で音読発表会を開いて自信を付けてきた学年であるので、その表現力をYICAでも広げられないかと考えた。」「３年生の理科学習で、昆虫の飼育に関する単元があり、青虫を熱心に育てるという学級の実態がある。昆虫への興味や関心をYICAにも生かし、『はらぺこあおむし』を英語で読み聞かせする好機と考えた」と記している[14]。ここでは、音読発表会や３年生に入ってからの昆虫の学習など学級担任だからこそ知り得る、子どもたちの様子が的確に捉えられている。単元作りの設定において、このような個別の実態を述べることは一般的な教師たちを対象とする本においてあまりふさわしくないと考えることも出来るかもしれない。しかし、このように担任独自の判断や見方を表明することは、現場の教師たちにとってはむしろ親近感と共感を生み、それぞれの教師の創造性を生み出す源泉となると考えられる。

第３節　現在のYICAへ

３．１．事例集の意味

横浜市がYICAの基盤を作っていったこの時期は、ほかの都市部と同様に教職員の大量退職、大量採用が続いている時期に重なっている。2010年には横浜市の教職員数約１万6000人のうち、採用５年目までの教職員数は全体の約26％を占めていた。このような状況において横浜市では、2006年より複数の先輩教職員が複数の初任者や経験の浅い教職員に助言を与え、支援する「メンターチーム」と呼ばれる制度の設置を進めていた[15]。このように横浜市の学校では教員同士が学び合い、高め合うシステムが作られているのである。さらに、横浜市では教科研究会の活動が盛んだという[16]。市全体で水曜日午後を教科研究会活動に取り組む日とし、教師のほとんどが教科研究会に所属している。こうして横浜市の教師たちは水曜日に開かれる教科研究会とそれとは別に行われている校内研究によって、授業力を向上させているのである。

現在、横浜市教育委員会では現場の教師たちに『YICA事例集Ⅱα』を配布している[17]。この本では小学１年生から６年生までの47の授業の展開例が具体的に示されている。全ての授業の流れが左のページ、英語の表現や会話例が右のページに記載されていて、分かりやすい構成になっている。例えば、小学校５年生の「道案内をしよう！」という単元では、学校の教室について語る際の語彙、道案内をする時の英語表現などが示されており、すぐに授業に生かせる情報を得ることが可能となっている[18]。授業の流れは基本的に挨拶、帯活動、展開、まとめ、あいさつで構成されており、それぞれの時間配分の目安も示されている。この本が2010年の『横浜版学習指導要領指導資料』に改訂を重ねて出来上がっているのは、明らかである。しかし、以前の指導資料に比べて、現場の教師たちが手にとってすぐに授業が出来る構成になっているのが印象的である。

おわりに

本稿においては以下の 3 点について明らかにした。

第 1 に、小学校・中学校の教師たちと横浜市教育委員会及び研究者の協同で2009年に作成された『横浜版学習指導要領』のカリキュラムを基にして、子どもたちは系統立った学びを継続していくことが出来るだろう。小学校から中学校までを見通した 9 年間のカリキュラムは、スモール・ステップで構成されており、教師たちは単元相互の関係を意識しながら、活動を進めていくことができると考えられる。重要なのは、YICAのカリキュラムが担任教師、AET、IUIとの協同で作り出される「コミュニケーション体験」を根幹に据えていることである。子どもたちは低年齢から外国語学習の基本となる、豊かなコミュニケーションの体験を積むことが想定されているのである。

第 2 に、2012年の『授業改善ガイド、単元づくり編』や2013年の『授業改善ガイド 教材研究授業実践編』では単元や授業を作る際の、教師の独自の見方が示されていた点である。教師の個別性や特殊性が認められていることによって、制度的に示されているカリキュラムから授業を作り上げる際の、教師の創造性を導き出すことが可能になっていると考えられる。

第 3 に横浜市の教師たち、研究者、教育委員会の不断の努力は、2019年現在でも使われている『YICA事例集Ⅱα』に結実している。授業の展開例及び英語の会話例を豊かに含むこの冊子は多忙な業務の中で日々の授業を作り上げる教師たちにとっては格好の素材となっているだろう。このような事例集は授業の類型化を招くよりはむしろ、現場の教師たちの負担を減らし、新たな授業を作り出す活力と余裕を生み出すものと考えられる。

それでは、私達は横浜市の英語教育から何を学ぶことが出来るのだろうか。本文で見てきた通り、横浜市では様々な研究を重ね、教師たちが日常の実践につなぐことの出来るカリキュラム作りを支援していた。2009年に『横浜市学習指導要領』が制定されてから現在に至る10年間は、まさにカリキュラムを微調整し、具現化していく、試行錯誤の時間であったように思われる。多忙化を招かないのであれば研究者、教師たち及び教育行政の協同研究はこれからも推奨されるべきであろう。横浜市の軌跡は、英語教育の改革が教師たちの声を丹念に拾い上げる作業の中から生まれ出たものであることを如実にあらわしている。私達は未来の英語教育を作る際に、教師たちの創造性を支える横浜市の地道な歩みから学ぶことが可能である。2020年からは小学校 5，6 年生でいよいよ英語が教科化して導入される。これからもどのような取り組みを続けていくのか、横浜市の英語教育に注目していくことを今後の課題として上げておきたい。

【謝辞】

横浜市教育委員会のご厚意により、『YICA事例集Ⅱα』を送っていただきました。横浜市教育委員会のご協力に心より感謝いたします。

【注】

1）2019年8月1日、『朝日新聞』「英語 発信力も基礎も不足」31面
2）高井延子、『Journal of Quality Education Vol.3』、「新しい学びとしての小学校英語活動」、pp.135-152
3）横浜市教育委員会（2009年）『横浜版学習指導要領』、YICA、外国語科編』p.4
4）同上、p.5
5）同上、pp.18-25
6）横浜市教育委員会（2010年）、『横浜版学習指導要領指導資料、YICA、外国語科編』p.3。
7）同上、p.3
8）同上、p.106
9）同上、p.85
10）横浜市教育委員会（2012年）、『授業改善ガイド、単元づくり編』p.10
11）同上、p.169
12）同上、p.169
13）横浜市教育委員会、『授業改善ガイド教材研究授業実践編』p.178
14）同上、p.178
15）横浜市教育委員会（2011年）『「教師力」向上の鍵「メンターチーム」が教師を育てる、学校を変える！』pp.10-23

16）同上、p.142
17）横浜市教育委員会、(2019年)『YICA事例集Ⅱα』
18）詳しくは表１を参照

【参考文献】

アレン玉井光江（2010年）.『小学校英語の教育法―理論と実践』株式会社 大修館書店
岡秀夫，金森強（2007年）.『小学校英語教育の進め方―「ことばの教育」として―』株式会社 成美堂
樋口忠彦，加賀田哲也，泉恵美子，衣笠知子（2013年）.『小学校英語教育法入門』株式会社 研究社
山脇啓造，服部信雄（2019年）.『新 多文化共生の学校づくり：横浜市の挑戦』株式会社 明石書店
横浜市教育委員会（2010年）.『横浜版 学習指導要領 指導資料 YICA、外国語科編』ぎょうせい
横浜市教育委員会（2009年）.『横浜版学習指導要領YICA、外国語科編』株式会社 ぎょうせい
横浜市教育委員会（2012年）.『言語活動サポートブック：繰り返し指導したい44の言語活動』時事通信出版社
横浜市教育委員会かながわ検定協議会（2009年）.『わかるヨコハマ』神奈川新聞社
横浜市教育委員会（2011年）.『「教師力」向上の鍵「メンターチーム」が教師を育てる、学校を変える！』時事通信社
横浜市教育委員会（2018年）.『YICA事例集Ⅱα』

小５［33］

表１　英語・会話例（『YICA事例集Ⅱα』より）

あいさつ

AET: Hello! (to HRT)	HRT: Hello! (to AET)
AET: How are you?	HRT: I'm (feeling), thank you. How are you?
AET: I'm (feeling), thank you.	
What (topic) do you like?	HRT: Wow. I like ~. What (topic) DO you like?
AET: I like ~.	HRT: Wow.
AET: Can you ~?	HRT: Yes, I can. / No, I can't.
AET: Really?	HRT: Really. Can you ~?
AET; Yes, I can. / No, I can't.	HRT: Really?
AET: Really. When is your birthday?	HRT: It's in (month). When is your Birthday?
AET: It's in (month). OK. Let's start!	HRT: OK!

（児童を巻き込みながら展開できるとよい）

帯活動　スモールトーク　学校の教室

HRT/AET;（３ヒントクイズ）

You can see many books.

You can read books.

It's on 3rd floor.　など。既習表現等を使いながらクイズを出し、教室の言い方を提示していく。

the music room, the science room, the principal's room, the teachers' room, the library.

展開　道案内をしよう

ペアを作り、一人がある建物の場所を尋ね、案内役がそこへの行き方を伝える。たずねた児童は指示通りに自分の駒を動かし、尋ねた建物に行く。着いたら役割を交代する。

HRT: Excuse me. Where is the supermarket?
AET: The supermarket? OK.
　　Go straight for two blocks.
HRT: Two blocks?
AET: Yes. Turn left.
HRT: Turn left?
AET: Yes. It's on your right.
HRT: Thank you.
AET: You're welcome. Have a nice day.

まとめ

AET: Nice to meet you, ○○, △△, and ◇◇!

HRT & AET: ○○, nice smiles! △△, nice eye contact! ◇◇, nice gestures!

（終わりの）あいさつ

Thank you! Good bye!